
モンスターハンターLEGEND

brave

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターLEGEND

【Nコード】

N3932N

【作者名】

brave

【あらすじ】

人は誰にでも苦しみや悲しみがあるものだ。

それはここに登場する者達も同じ。

親を亡くす悲しみ。

大切な者に裏切られる痛み。

親に自分だけを置いてかれた寂しさ。

自分の存在について深く悩む悲痛。

仲間が存在を否定する孤独

そんな葛藤や苦難を乗り越えながらシキ達は成長していく。

「さあ、武器を取れモンスターハンター。」

そして世界の全てを知るが良い！！」

今、冒険への扉が開く

第一話 † 狩人 †（前書き）

皆様はじめまして。

私の名はb r a v e、訳して勇気と申します。

さて、今回のテーマは

『光と闇』になります。

世界観はモンスターハンターオラージュを元にしています。

だいたいキャラクターはそちらと同じになっていますのでそちらをご覧ください。

では、本編に移りたいとおもいます。

どうぞ。

第一話

† 狩人 †

【この地には一つの言い伝えがあった。

夜空が星に覆い尽くされる時、楽園と地獄の狭間より輝く龍出づる。

その龍は、全ての大地に不幸を与え、全ての大空に破滅を齎し、全ての生命に絶望に苦しませるだろう。

やがて夜空の星は消え、最後の星
ミオガルナ
だけが地上に残る

そしてその龍を討ち滅ぼす者がいた。

四方の世界より青龍、朱雀、白虎、玄武。

世界に滅びを与えようとした輝く龍を阻止するために現る。

四方の世界の者達は輝く龍を世界の中心に封印し、どこかへ消えていったという。

後に四方の世界の者はいずれ護り神として崇められ、その者達に星の名前を与え、四聖獣と呼ばれるようになったという。】

――――

「狩りに生きる者、それは己との戦いなリイイイ！――」

森林の中を駆け回る少年シキ・リュウホウは師匠、グレリイ・ジェスカーと共に狩りに出ていた。

グレリイの姿は身長180センチメートルくらいで、全身を青と白の色で鎧で身を固めて、蒼い髪をスーパースイヤーみたいに逆立て、髭を生やすといったまるつきりおっさんのような姿であるが実年齢25歳というまだまだ若い男である。

因みに鎧や装備を詳しく説明するなら、名前は氷狼獣【オルガロス】の素材から作った防具で、胸部分から脚の部分まで蒼い金属で出来ており、その上からオルガロスの毛皮を縫い付けたような形をしている。

武器もオルガロスから作られていて、

名前は【ダイダロス】

種類は大剣で、重量は50グラムくらい。

大きさは縦は200センチメートル近く、横は40センチメートルくらいある。

オルガロスの毛皮を持ち手近くの部分に縫い付けて、峰に甲殻を貼り付けたような見た目をしている。

そんな重くて大きな武器を操れるお師匠様は凄いとシキは毎度の事

思うが、グレリイの熱血オヤジな部分には正直疲れている。（とか言っておきながらいつもつられてしまうシキだが）

そんな事は置いて、まずはこの地について説明しよう。

この辺りは森林と呼ばれる場所で、モンスターが沢山生息している。イャンクックやクルペッコ、時たまリオレウスやイャンガルガなどの凶暴なモンスターも現れるらしい。

そして今回のモンスターは【ドスランポス】で危険度 1、新米ハンターでも楽々狩る事が出来るモンスターだ。（だからといって侮るのは禁物）

そんなモンスターだが何故そんな雑魚と関わる事になったか。

とりあえず読者のみなには、今回ドスランポスを狩る事になるまでの回想シーンを見てもらいたい。

――回想、森林のテントにて。

時刻は朝9時

ちよつど朝飯を食べ終わつたくらいの時間帯である。

「お師匠様ア――！今日は一体何をするんですかッ――！！」

毎度の事だがこの時間帯くらいになると大体こんな事をいう。

グレリイにとってこのくらいの事はお見通しだ。

何故ならもう出会ってから数年も経つからである。

数年も一緒にいれば嫌でも分かつてしまうもの。

そのため先日のうちからすでに準備をしていた。

「今回はドスランポスを狩ろうと思う、準備が出来次第行くからいつでも行けるようにしておけよ」

「はいッ――！お師匠様ア――！！」

そう言いながらシキは武器や装備、身支度を整える準備をし出した。

グレリイはすでに準備が出来ているのであとは武器を持ってアイテムポーチを腰に掛けるだけ、至って楽である。

因みにアイテムポーチの中身は何も無い。

相手が雑魚過ぎるからだ。

一人前のハンターとなればそれくらいの余裕はできる。

だからアイテムが要らないとなるわけだ。

（採集目的や発掘目的ならば虫網やピッケルなどの道具くらいは入れるが）

グレリイは手近に置いてある木製の椅子にもたれかかるように座りシキの動きを眺める。

ちょうど今腕部分の防具の装着を終えて、胸部分の防具に手を掛け
ている所だ。

楽しそうに、まるで欲しいものを買ってもらった時のように喜びに浸っているシキを見ながら昨日の事を思い出す。

ドスランポスを狩る事にした時の事だ。

――回想中の回想、夜12時のテント前

街中が静まり返り、月の明かりが地を照らす時間。

その頃懐中電灯の光で照らされた部屋でグレリイは次の日に出掛ける予定を立てていた。

因みにシキは鼻風船を作りながらぐーすか寝ている。

そんなシキを見ながら苦笑いして、本題の方に取りかかる。

「それにしても悩むなあ」

今までの狩猟はたかだかランプスやファンゴなどの雑魚系モンスターを狩ったり、一定のアイテムの採集をしたりだけの至って簡単な作業であった。（勿論これもハンターとして重要な事なので立派な作業だが）

でも今回は違った。

たまには大物を狩猟させてやっても良いんじゃないか、と考え始めていたからだ。

大物と言ってもまだシキは十歳で、それくらいだと小学3、4年生くらいの年頃。

あまり大きすぎると危険なので、なるべく比較的小さくてそれでもシキを満足させられそうな相手は・・・。

・・・いた。

ちょうど良いのがいた。

グレリイはふと思い浮かんだモンスターの姿が脳裏に浮かんだのだ。

何から思い出した、などの理屈はない。

ただの発想、思い付きだ。

それを次の日の狩猟対称に決めたグレリイは明かりを消して眠りに
ついた。

・・・

・・・

――回想終わり

（やっぱり大物にしといて正解だったな）

グレリイはそう思いながら狩猟に行く準備をしているシキの様子を見てみた。

どうやら胸部分がなかなか頭を通らないらしい。

グレリイは椅子から立ち上がってシキの元まで歩み寄る。

何故ならシキはいつも胸部分の防具を装着するのに手間取っているからだ。

「貸してみる、俺がやってやる」

そう言っただけグレリイはシキが今手に取るうとしていた胸部分の防具を奪い取るように掴む。

そして防具を頭から突っ込むように入れさせる。（無理やりに）

「いったああああ！！、お師匠様！！もうちょっと優しくやって下さい！！」

肩に防具が入りかけたところでシキはジタバタと暴れ出した。

グレリイはシキの後ろで企みが成功した喜びに浸りながらニヤリと笑う。

これで分かるだろうが実はわざとやった事である。

いつもシキの反応が面白くてついついやってしまっただ。

「ほれほれ、頭を出せるものなら出してみろ。ほれほれ」

「わざとやってますよね、止めて下さい」

「俺を越えてみる」

「格好つけてないで早く――!!」

。

――回想終わり

と、過去にあった話はこんな感じである。

ドスランポスを狩猟対象に選んだのはシキを喜ばせるための算段だった。

だがどうやらそれでも不満のようだが……。

と、ここでシキ視点に戻るとしうか。

正直朝は疲れたとシキは思ったが、もう過去の話なのでグチクチは言わない。

グチクチするのは嫌いでいつも一直線だからだ。

無駄口はこのくらいにして本編に戻る。

「シキ！……群れのリーダーは俺がやる！……オメエは雑魚を引きつける」

「何を言ってるんですかお師匠様！！！」

今の自分にはこれくらい朝飯前の寝起き前ですよオオ！！！！」

「バツカバカモーン！！！！」

グレリイはダイダロスを上に向けて自分を取り囲む雑魚共、及びランポスを振り払う。

吹っ飛んだランポスはそれだけで死亡。

「いつも言っておるうが！！！！これも訓練の一つじゃい、チームワークを乱すんじゃない」

「狩りに生きる者……それは飛竜との命のかけひきによって鍛えられるんですよお師匠様！！！！」

俺が倒すべき飛竜はアア、今！！！！この空を舞っているんですよ！！！！

こんな雑魚では役不足！！！！」

後半部分で手を振り上げながら言い、最後は双剣を持った状態でランポスに向かって手を向けた、攻撃を仕掛けようとしていたランポスはそれにシヨックを受けて転倒してしまう。

そして間髪入れずにまたグレリイの声が響いた。

「真のハンターこそ基本を・・・知識を・・・、そして仲間を大切にするんじゃないやああ！！！！」

「仲間？」

「仲間を信じてねえ奴あ誰にも信じてもらえねえ！！！！」

「信じる心・・・！？」

ここから白熱の熱血話へとそれていく事になる。

「そつだああシキイイ！！！！」

「うおおおお、お師匠様アア！！！！！！」

「勇気×友情×涙の答えを言ってみろオオ！！！！！！」

「バツカバカモーン！！！！それが”信じる心”だあああつ！！！！！！」

「お師匠様ばんざーい!!!」

「・・・・・・・・」

外から眺めていたランポスは、答えにもなっていない意味不明なシキと熱血話に心を燃やすグレリィに聞いて呆れていた。

そしていつの間にか置いてけぼりになっていたドスランポスは群れを連れて去ろうとする。

「あつ!! 雑魚共が逃げるぞオオ!! 追えエエ!!!」

「了解!! お師匠様ア!!! 行つくぞオオ!!!」

その後逃げられては追いそのたびに話が反れの繰り返しで終わった。

―――森林、テント前にて

暗闇に塗りつぶされた夜7時。

あの後結局ドスランポスを狩る事が出来ず逃げられてしまいこんな遅い時間になってしまった。

息を切らしながら住み家であるテントまで歩いてきたのだ。

「ぜえ……はあ……やっとテントに着いたあ……」

「疲れたな……さつさとテントに、戻ると、しよう」

言葉を切らしながら二人はテントの入り口を開ける。

二人はテントの真ん中に着いた辺りで倒れ込む。

今日は本当に疲れた。

ドスランポスが逃げるのを追いかけて、そのたびに熱血話に話が逸れて、その間にドスランポスは距離を離し、の繰り返し。

結局最後は体力の関係でドスランポスの勝ち、逃げられたのだった。

グレリイはその事を思い出してあれは惜しかったな、と心の中で悔やむ。「第三者から見れば全く惜しくない、ただの錯覚だ」

理由は簡単、グレリイは大の狩猟好きだからだ。

見てる限りシキも狩りに目がないようだが、グレリイはそれに負けないくらい強い。

今はもうどうでも良いけど、この世のモンスター全てを狩り尽くしたい、とまで思うほどだった。

今はそう思わない理由に関してなら、また後ほど語る事にする。

ひとまずそれは置いて、とりあえず言いたい事は……

（疲れた）

の一言だけだ。

グレリイは時間を見計らうように外の星を見る。

これもまた先読みの一つである。

そう、シキがこの時間帯に問ってくる事の予想だ。

グレリイはテントのどこかに隠しておいたとっておきの秘密兵器を取り出してくる。

シキは魚が水に餌を撒かれた時のようにピクリと反応する。

さっきの疲れはどこへやら、身体を飛び上がらせて大はしゃぎです。

「やった！！今日の晩飯はファンゴ鍋だ！！」

そう、取り出してきたのは晩飯、及びファンゴだ。

ファンゴ、簡単に言ってしまうば猪の事だ。細かい説明をするよりそう言った方が分かりやすいだろう。

シキはこのファンゴ鍋が狩りをする事くらいに大好きなのである。

それはもう世界中のファンゴを全て食べてしまいたいくらいに。

だから今日の晩飯はファンゴ鍋にした。

半分はドランポスを逃がした事でしょんぼりした心を落ち着かせるためのものであったが、シキの場合はそれほど生温い表現では済まないほど元気になったようだ。

「シキ、手伝え」

「了解！！喜んで！！何をすれば良いんですか？」

「このファンゴを外まで運び出すんだ、良いな？」

「はい！！お師匠様ア！！」

その言葉と同時にシキはグレリイが持つファンゴの反対側に立って、ファンゴの重たい身体を合図と共に上に持ち上げる。

グレリイにとっては四十キロくらいある大剣を片手で振り回すほどの強豪なので全く重くないが、シキにとっては凄く重たい。

骨が軋むような音を聞いた気がしたが気のせいだろう、気のせいでありたい。

二人で引きずるように持ち運んでいるため上手く足取りが掴めないが、グレリイの力のおかげでシキは何とか耐える事が出来ている。

そうやって運んでなんとか外まで持ち運ぶ事に成功した。

あとはどこに置くかだ。

それをファンゴを持った手と反対の手でシキに指で指示する。

「シキ、これをあそこまで持っていくぞ」

グレリイが指差した場所にはテントから少し離れた雑草があまり生えていない土の地面があつた。

「わかりました、お師匠様」

その場所を確認したシキは対して元気に返事をする。

言われた事に従い、シキはグレリイが先に進むのに付いて来る。

グレリイが指を指した場所に着いた辺りで立ち止まる。

「よっこらせつと」

一瞬の疲れを解く^{ほど}ようにその場にファンゴを置くとグレリイは次の指示をシキに与える。

「今から俺は焚き火の材料になりそうな薪を探してくる。お前はその間にファンゴを食べられるくらいの大きさにまで切り刻め」

「了解、お師匠様」

その言葉を言い終わるか終わらないくらいで「大きさはお前の好みで良い」と告げグレリイはテントの中に入って端の方にもたれ掛かっていた大剣を軽々と片手で持ち上げ、最後に「頑張れよー」と残り、意気揚々とその場を去る。

その背中にシキは自分の意志を乗せて手を振る。

「お氣をつけてー。よーし、頑張るぞっ！ー！」

グレリイに対して応援の言葉を伝えた後、シキは気持ちを入れ替えて力を入れる。

第一話

† 狩人 †（後書き）

いかがだったでしょうか。

まだ書き始めてあまり経っていないので、一部変な表現をしているかもしれませんが、見つけ次第いつでもご指摘下さい。

感想などや質問もいつでも受け付けております。

長々とお待たせいたしました。

次の更新はいつになるかはわかりませんが、一週間以内に更新する事を予定しております。

それでは皆様、さようなら！。

第二話 † 歌声 †（前書き）

今回は新キャラが出ます。

そして新キャラでありながら、オリジナルのキャラでもあります。

早すぎだろって言う人もおられるでしょうが、気にしません。

どんなキャラかは見てからのお楽しみ。

それでは本編をどうぞ。

第二話 † 歌声 †

「さて、始めるぞぉー！！！」

俺は今からお師匠様に言われた事（ファンゴの斬り刻み）を始める所だ。

ファンゴの身体を片足で手元まで蹴り上げて、双剣をファンゴの胴体に向ける。

「はぁッ！！！」

俺は手を振り上げると同時に気合いを入れる。

体中が赤く光って、力がみなぎるのを感じるが、それは気にしないでおく。

だって考えるのめんどくさいからな。

さて、余計な話が入ったけど

「行くぜッ」

その言葉と同時に俺は斬り刻み体制に入る。

最初に右腕から動きを始め、右上から斜めに、次に左腕も左上から斜めに下ろす。次に上から斜めに振り下ろした右腕を元に戻して下

から斜めに振り上げ、更に左腕も同じように戻してから斜めに振り上げる。

そして右腕を水平に線を引くように腕を振って、左腕も同じように振り、最後に両腕を上から振り下ろす。

この鬼のような怒涛の攻撃動作を俺はこう締め括る。

「鬼神斬りッ！！！」

鬼神斬りを終えたあとファンゴはバラバラに解体され、原型を残さず崩れ落ちた。

解体を終えて一息し、一度気を抜くと、まるでタイミングを見計らったように俺の耳に、女の子の透き通った静かな歌声が聞こえてきた。

「~~~~~♪」

この分だと結構離れた所から聞こえるらしいな

歌声というより鼻歌に近かったが、そんな事はどうでも良い。

「ああ、綺麗な歌声だあ」

俺はただこの花畑にいるような、楽園で駆け回る一時のような楽しい感情にさせる歌声を純粹に受け止める。

なんだか誘われてる気分だ。

俺は身を任せるように歌声の響く森林の奥へと歩き出す。

「~~~~~♪」

楽園にいるような気分になりながら草と土の道を歩き続ける。

ずっと歩き続けると保たなくなつて、俺はうなだれるような体制で歩き始めた。

「~~~~~♪」

疲れてきたのが原因かは分からないが、歌声が突然に氷河の道をただひたすら寂しく歩き続けるような悲しい歌声に変わる。聞いているとこっちまで寂しい気持ちになる。

そんな寂しい気持ちになるこの綺麗な歌声の正体を知りたいと思い、また更に歩き続ける

土と草が混じり合う道をひたすら突き進むと、歌声が聞こえる場所に着いた。

「この辺か、さっきの歌声が聞こえたのは」

そう言いながら辺りを見渡してみるが、どこにもそれらしいものは見当たらない。

森林の奥が広いからか、それとも夜の森林だからか、どちらかは分からないが、それが影響して四方から歌が聞こえてくるように感じて、そのせいでどこから鼻歌の聞こえてくるかがわからない。

歩き続けて足が疲れた俺は一度立ち止まって、首だけを動かして、視線を辺り一帯に向ける。

今気付いた事だが、その光景はさっきまでの真っ暗な世界ではなかった。

辺りは真っ暗な世界を、月の光は闇を拒むように地を照らし続け、地はそれを当然のように受け止めている。

例えるなら、それは月の光で作られた花。

月光の光が花開くように散開し、辺りを純白の明かりで埋め尽くす。

まるでそこにしか存在しない特別なモノだった。現に俺は他の場所
でこんなに綺麗な光景を見たことがない。

その光景を釈然とした様子で眺める俺は、足の疲れなどすっかり忘れ、今やそれに吸収されるように取り込まれていた。

それからしばらくして、俺はその光景を見入っていて、気付かずの内に本来の目的を思い出した。

「あ！忘れてた！！。そう言えばこの辺から歌声が聞こえてきて、その正体が何か気になってここまで来たんだっけ」

そういう俺は気を取り直して、辺りを見渡すために動こうとした。

と、その時。道の先、さっきまで進んでいた方向で奇妙な事が起こり始めた。

その先で唐突に一つの木が光り始めた。なんの変哲もない木が、どこにでもありそうな、地面から突き出すように生えた木から枝や葉を飾る普通の木が、突然光を放つ。その光は月の光に負けないくらいに眩しい。

まともに見えなくて、目に直線降りかかる眩しい光から守るように手を添えているからあまり光った木を見る事ができない。

それでも指と指の隙間から自然に見えてくるその光景を見る限りでは、光が拡散し、やがてその光は木を包み込むように覆って、最後には木が光を吸い込むように消えていった。

「ん、う、うーん。なんだったんだ今の光は」

気が付くと光は止んでいた。

まるで何事も無かったかのように・・・

だが俺は一つだけの違いを見つける。

それはさっきまで何も無かった場所に、一つだけ窪みのような、無理やりに掘ったような穴があった。

それは先ほどまで光っていた木。まるで元々そこに存在していたかのように、当然であるというようにそこに存在した。

「あれは・・・穴？さっきまでは無かったはず・・・」

その穴をじつくりと目を凝らして覗き込む。

その穴の中には一人の女の子がいた。

ただし遠くからだから、あまり姿形まではわからない。白いワンピース

ースの女の子が小さくうずくまっている姿しか見えなかった。

でも俺はどうしてもその女の子の近くに行ってみたかった。こんな所で何をやっているのか、そして今まで何をやっていったのか、なんで今までこの窪みの中を見る事が出来なかったのか、それを知るために、俺は動いた。

――ー森林、某所

苦しい・・・

頭が痛い。

私は今何もない場所で一人寂しくうずくまっていた。

私がそうしている理由は外の世界が怖いから。そもそも外の世界に出られないからでもあるけど。

そんな私は時々変な夢を見るの。例えば私と同じ歳くらいの男の子が、大人の男の人と一緒に、青いトカゲみたいなのと戦ってる夢だったり

私より年上のお姉さんが、お友達だったはずの人に傷付けられて泣いてたりとか。

最初はそんな感じだったんだけど、いつ頃かなあ。夢の内容が激しくなっていて、ザザザーって音とかモヤモヤしたのが出たりとかして邪魔されるの。

でも一応夢の内容は見えてて、例えばいつも夢で見る男の子と似たお兄さんが、さっき言ってたお姉さんと似た女の人と争ってたり、黄色い髪のお姉さんと、いつものお兄さんが喧嘩してたりとか色々。

そんな夢を見るたびに今みたいに頭が痛くなる。

だからいつも鼻歌を歌って気を反らしてた。

でも正直疲れたよ。

何度か死のうと思った。

でもこの何もない世界ではどうする事もできない。それ以上に身を投げる勇気がない。

本当に死なせてよ・・・

『お師匠様！！何だよ！！。死なないで下さいよ！！、あんな程度のモンスターお師匠様の力があれば簡単に狩れるはずですよね！

！
『

『すまん、（ザザザー）。俺の力では、何も、する事は、できないんだ』

『いつもみたいに「バツカバカモーン」って怒鳴って下さい！！、お願いだからお師匠様！！起きて下さい！！！！』

『もう保たん。（ザザザー）お前はこれから、一人前に成長したら、世界を歩き回って、旅をしろ。そうしたら、きっとお前が憧れてるミオガルナを、見つける事が出来る。俺が生まれ変わるような事があれば、今度は対等な立場で話し合おう。それじゃあ、元気で、な・
・・
』

『待つて下さい。（ザ）師^ザよう（ザ）まアアア（ザザザザざざざざ）！！！！』

夢がどんどん遠ざかるように、ノイズのようなものに包み込まれながら消えていった。

・・・またあの夢だった。

たまに同じ夢が出てくる時があるの。最近はずっきの夢ばかり。

夢は私に恨みでもあるのかな・・・

さっきの夢は男の子が、男の人を抱きかかえて死ぬのを止める所。

とっても悲しい話だった。私にも同じ事があつたらどんな感じなんだろう。

でも、なんだろう。男の子の気持ちになんともなく共感出来る。まるで身近な出来事のように感じる事が出来る。今までそんな事無かったのに・・・

苦しみ悶える私は、さっき見ていた謎の映像に悩みながらうつろくまっている、外の世界から突然に男の子の声が聞こえてきた

あやふやな言葉で聞き取る事が出来ない。

だけどこれだけは分かる。

きつとこの声は悪夢の中に出てくる男の子だって事。

そしてその男の子はきつと私を認めてくれるという事。

だから私は恐れない。

何があるのかもわからない世界に怯えない。

だってその男の子は私を支えてくれると信じる事ができるから

私は強い思いを胸に、外の世界へ出る事を決意した。

―――同所、同時刻。シキ視点。

俺が窪みのそばに近寄ると、中でうずくまっていた女の子が外に姿を現した。

遠くからじゃ分からなかった容姿が分かるようになり、俺はその姿を上から下まで眺めてみる。

見た目だけで決めてしまうなら俺と同じ年頃くらいの女の子で、大体11歳くらいかな。

その年齢見合うように身長は110センチメートルくらいか。黄を更に薄めたような卵色の髪と、青空のように透き通った蒼い瞳が特徴的で、服装は白いワンピース。

純白がイメージ色に合うと思う。

俺はその女の子をじっくりと眺める。

女の子はどう思っているか分からないが、まるで話し掛けられるのを待っているようだった。

ようし、ここは俺が仲良くなるための架け橋となつてやるぜ。

「どうしたんだ？そんな呆然と突っ立って。会ったらずは自己紹介だぜ？」

俺はなるべく気軽に話し掛けたつもり。それでもぎこちなかったけど、とりあえずきっかけになればそれでよし。

それでも女の子は動きを見せなかった。

なんだ？俺を見て目を見開いてる。

こんな所で一人寂しく住んでたから人と関わる事になれていないのかな？。

仕方ない、俺から紹介するか。

「俺の名前はシキ・リュウホウ。何かこの辺りで歌声が聞こえてきたから気になって来てみたんだ。君は？」

相手と話す話題を作るためまずは俺から。

それがやっと伝わったのか、俺の方に視線を向けて、女の子は口を開き、ゆっくりと言葉を告げる。

「えっと……。わ、私はエリス、エリス・ド・ランテ……」

それだけ言うとエリス（初対面で呼び捨ては聞き捨てならないが）は、また沈黙を始めた。

恥ずかしがり屋なのかな？

エリスはさっきの言葉以来ずっとチラチラとこっちを見たり、目を向けると目を反らして、その繰り返しだった。

この子は何をしたいんだ。

よし！！、そういう時はきっかけを作ってやるべし！！！！。

じゃあ何をするか、だな。

何をキツカケにすれば……

あ！、そうだ。

探検なら楽しめるかな。

探検なら、しているうちに慣れるかもしれない。

よし、決まりだ！！！！

「なあ、エリス」

礼儀の欠片かけらもない呼びかけにエリスは反応してくれた。

身体をピクツとさせて視線をこっちに向ける。

「この森と一緒に探検しようぜ！！」

その言葉を聞いたエリスはまたピクツと身体を震えさせた。

どうやらさつきとは違って、行きたくないって感じの震えだけだな。

けどそんなのは関係無し。

強行突破だ。

「ほら、行くぜ!!」

「え、えーと、その、え?あわわわわわ」

俺はそう言いながらエリスの言葉を無視して歩き出す。

途中から言葉が変になったのは急に引つ張ったからだろうか関係なし。

エリスを無理やり引き連れて歩く俺は、暗闇の中を手探りするような動作で歩き続ける。

一歩一歩歩くにつれ、テンションが高くなっていった。

ワクワク気分でいっぱいだからエリスの気持ちも考えていない。

――森林奥深く、
グレリイ視点。

「うおらあッ!!」

一方、グレリイはその言葉と同時に森林に生える木々を風払うような動作でどんどん斬り倒していた。もの凄いスピードである。

そして最後の一本を縦向きの溜め斬りで締め括った。

「疲れたな。さあて、帰るか」

一息吐いた俺はテントに向かって足を運び始める。

俺はシキの事情など知らず、自分の目的だけを考えていた。

――エリス視点

私は今彼に手を握られながら、無理やり森林の道をひたすら歩かされていた。

本当はあまり木から離れたくなかったけど、でも私は彼ともつと関わりたいと思ってたから、彼の行動に合わせて私もついて行った。

元々狭い世界から出るためにシキの前に現れたんだから当然なんだけど・・・。

「ねえ・・・シキ」

私の声は全くシキには届かないようで、気付いてもいないみたい。

「ねえ・・・」

「さあて、どの辺あさってやろっかなあ」

「ねえ・・・」

「お？あれは何だ？」

「ねえ・・・」

「青いなあ、あれってまさか!!」

「ねえ・・・!!」

私はさつきよりは強めに声を発した。それでも小鳥がさえずるような小さな声だったけど、なんとか聞いてくれた。

「え? ああ、ごめんごめん。俺何かに熱中したら周りが見えなくなるからさ」

何か真剣身の欠けた言葉だけど、気付いてくれたからそれで良い。

「あ、あのね。て・・・手離して? ちょっと・・・痛い」

用は小さな事だったけどこれが初めての会話。これをきっかけにもっと会話出来たら良いな。

「あ、ああ、ごめん。痛かったか?」

「うん・・・」

私達二人はまるで月と太陽。対照的な存在だけどそれは離れたくて

も離れられないって事にもなる。だっていつも反対側にいるんだから。

だから私達も同じようにきつと仲良くなれると思う。私は信じてる。

私が沈黙を続けていたからなのか、シキはまたどこか違う所を見ていた。

それからしばらくシキと話す事はなく、シキだけ一方的に独り言のように喋って（動いて）、私は沈黙を続けながらそれについて行くの繰り返し。

ただそれだけだった。

数十分経ったか経たないくらいに、ふと気付く。私はその気づいた事に焦っていた。

その気づいた事というのは・・・

時間、大丈夫かなあ。

そう、私は時間の事で焦っていた。

一方的に喋り続けるシキは、何も気にする事もなく、ひたすら探検の続きをしている。

私はそんなシキの背中に声を掛ける・・・が、やっぱり一度では聞き取る事はなく数回繰り返した所で・・・

「ん？何だ？」

と、答えた

良かった今度はちゃんと聞いてくれた。

「そろそろ・・・帰った方が・・・」

途切れ途切れの声に対してシキは指を顎に当てる仕草をする。考えてるのかな

「うーん。まあ、こんな遅い時間まで女の子が外にいるのは危ないからな。よし！！、帰ろう。」

夜遅いし、送ってやる」

「ありがとう・・・」

「さあて、帰るか！」

私は歩き出すシキの背中を、ゆっくりした足取りで追いかける。

暗い道のりをひたすら歩き続けると、その先に幾つもの影が見えた。

「ん？あれは・・・」

薄暗くて周りがよく見えないせいで、その正体が分からない。

「ランポスだ！！」

私には正体が分からなかったけど、どうやらシキには正体が見えるみたい。

「これで昼のお返しができるな」

その正体が分かった瞬間、シキは急に感情を高ぶらせる。

昼に何かあったのかなあ・・・

「シキ、ちょっと・・・」

「ハンター魂が沸騰寸前だアアア！！！！いつくぜエエ！！」

シキは私の言葉を聞かないで、颯爽と私の前から走り去っていく。
ランポスという獲物目掛けて。

「どりゃああああッ！！！！」

叫び声を上げながら、背中に差している双剣を手に取り、これでもかッ！とでも言わんばかりに力を込めて、両腕を振り上げて斬りかかるシキ。

ただどあまりにもワンパターンなシキの攻撃は、全く通用しなかった。

避けられるの当たり前前だと思う。だって一直線に突っ走っていくだけだったから。

振り下ろした直後で、少しの間隙が出来てしまったシキを、ランポスは横から噛みつきこうとした。

そのランポスの噛みつき攻撃は、身のこなしの早いシキのワンステ

ツプ（横移動）で避けられる。

私はそのシキの動きを見て、度肝を抜かされた。

だってあれだけの隙を見せておいて、直ぐに向きを変えて、方足で軽くステップを踏んだだけで避けたんだから。

何がそれだけの運動能力を生むのかは分からないけど、凄いつて事だけは言える。

「うおおおおッ！！」

どこにでもあるような叫び声を張り上げて、シキは次の行動に出る。

噛みつきに掛かってきたランポスの頭を縦に線を引くように一閃。

――一度作者視点になる。

ランポスはワンパターンで、隙の多い行動しか出来ない。

バックステップ、雄叫び、噛みつき、飛びかかりくらいしかパターンが無く、そんなランポスなんぞシキにとっては朝飯前の寝起き前なのだ。

―――またエリス視点に戻る。

ランポスの身体は、シキの縦一閃による攻撃によって、真ん中から真っ二つに分かれた。

二回分の攻撃で傷口が一つしかないのは、きっと両腕を同時に振ったからだと思う。

攻撃の瞬間はあまりの素早さで見えなかったけど、シキが最後にしていたポーズから何があつたのかが分かった。

「またつまらぬ物を斬ってしまった・・・なんてね」

舌を口から出しそうなくらいの愉快的な声を聞いて、私まで愉快的気分になる。

シキと一緒にいると楽しい、

会ってから数分しか経ってないけど、それでも分かる。

今までこんな気分になった事は無かった。

いつも木のくぼみの中で一人寂しくうずくまっていただけだったから。

外に出たのは間違いじゃなかったね。

「ふう・・・討伐完了！」

ランポスを倒した嬉しさにガッツポーズをするシキ。

そんなに嬉しいのかなあ。

「さて、今度こそ帰るか」

そう言いながらシキは、さっきと同じ進行方向に向かって歩き出す。

私もそれについて行くこととするが、その途中にどこから来たのかは分からないが、私を邪魔する者がシキと私の間を横切るように現れた。

「クオオオ！、クオオオ！」

さっき見たランポスより少し大きめの身体をした化け物と、それに群れるランポスだった。

私は急に化け物が目の前に現れた事に驚き、後ろ向きに転けて尻餅をつく。

「ッ！」

言葉にもならない叫び声を上げた所でシキの動きは止めて振り向く。

一瞬私を見た後、シキはランポスより大きめの化け物を睨んだ。

「俺の友達に手、出すなよ」

凍えるほど冷たい声で、化け物に言う。

その冷たい声に反応し、化け物はビクツと身体が震えを上げる。

私もこの小さな身体のどこにそんな怖さがあるのか、と思いながら目を反らす。

何？今の。シキって本当に私と同年？

そう思わせるほどさっきまでの雰囲気と違って、身体から炎を発しそうなくらいまでシキは怒っていた。

それでも化け物は、恐怖に負けないくらいの勢いでシキに襲い掛かる。

化け物は地を駆けて、その勢いに乗って、飛び上がった。

化け物を取り囲んでいたランポス達は、シキを逃がさないように、四方八方から攻撃を仕掛ける。

シキは逃げる事も避ける事も出来なくなってしまうた。

「取り囲んだって無駄だぜ。

そもそも俺は逃げるつもりは毛頭ねえ、俺はいつでも直球一本槍」

シキはそう呟きながら、右肩を上にとって行き、左腕を前に持っていく。

それと同時にシキの身体から、真紅のオーラが放たれる。

そのオーラは炎のように燃えたぎり、空気を焼き焦がすように空を焼く。

それはまるで熱き烈火の如く。

離れているのに、そのオーラの熱に焦がれそうな勢いだった。

な、何？あのオーラ、人ってあんな熱いオーラを放てるの？。

私は表情を強ばらせたまま、シキに視線を向ける。

目はさっきの冷たい凍えたものとは違って、怒りの感情に身を任せ
たような熱い烈火の目。

目の色は普通の時は黒かったはずなのに、何故か今のシキの目は炎
に包まれたような灼眼になっていた。

私はその状態がどのような影響を及ぼすのかは分からないけど、今
のシキはどんなものにも負けないような気がした。

化け物とその群は、どんどんシキに近付いていき、そしてそれらの
攻撃は直撃した・・・

かのように見えた。

化け物とその群の攻撃が当たるその瞬間、構えた状態だった右腕を
前に振るうと同時にジャンプして、身を上下左右に高速で回転させ
て、周りを取り囲むモンスター達を振り払った。

それはまるで球型の竜巻が、ゴミを振り払ったような感じだった。

振り払われたモンスター達は、飛んできた方向とは反対の方向に、凄い勢いで吹っ飛んでいった。モンスター達は地面を転がっていき、木にぶつかってようやく動きを止めた。

シキの方は、あれだけのスピードで回転したにも関わらず、目を回して混沌するわけでもなく、平気な顔をしてその場に立ち尽くしていた。

私はそれを見て目を丸くする、信じられないものを見たんだから当然だけど・・・。

シキの方もそうだけど、モンスターの群もどうなったのか気になって見てみると、ランポスの群はさっきの吹っ飛びで、完全に力尽きていた。

でも大きい化け物の方は、まだ息が残っていて、瀕死状態だった。

それ故に、足を引きずりながらシキがいない所に、残った力を振り絞って逃げようとしている。

だけど、怒りに満ちたシキはそれを逃がすわけもなく、逃げようとしていた化け物に向かって疾風のように高速移動。

その迅速はきつと紅いオーラが原因だと思う。

化け物を追い込んだシキは最後の留めを刺す。

鋭い目つきで睨んで化け物を威嚇し、怯んだ所を両手に持つ双剣で超高速攻撃。

それはまるで鬼神の如く。

「鬼神斬りッ!!」

シキは攻撃の締め括りに名乗り上げるように声を発する。

鬼神斬りによって化け物は完成に死に瀕した。

死んだ化け物は地面に伏せるように力尽きてしまった。

それと同時に、シキの身体をまとっていた紅いオーラは空気に溶けるように消え去っていく。

完全にオーラが消え去った後、シキは息を切らせながら私の所にゆらゆらとした足取りでこっちに向かってきた。「はあ・・・はあ・・・、大丈夫か？」

途絶えさせながらで言葉が聞き取りづらい。

だけど、なんとか理解出来た。

「だ、大丈夫・・・」

呟くように小さな声でそう告げた私は、シキの方に向けていた視線を、別の方向に反らす。

なぜそうしたかは、さっきまでの出来事を見て、心がついていけないから。

「良かった・・・」

そう言いながらシキは、私に全てを預けるかのように、森の地に突っ立ったままの私にもたれかかってきた。

シキの様子を見てみると、寝てしまったみたい・・・

きつとさっきので疲れたのかな

ゆっくり休んでね・・・

その様子を私は、母親が子供を安心させるかのように見守った。

第二話 † 歌声 †（後書き）

本編はどうでしたでしょうか。

エリスのキャライメージは、キングダムハーツのナミネですね。

完璧合います。

声イメージは、ナミネそのままか

【豊口めぐみ】さんですね。

他にイメージがあるなら教えて下さい。

面白そうな気がしますから、みなさんがどんなイメージを持つが。

さて、無駄話はこのくらいにして終わりにしますか。

第二話、† 歌声 †

閲覧頂きありがとうございました。

次話をお楽しみに。

それではー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3932n/>

モンスターハンターLEGEND

2010年10月10日15時53分発行